セルエルやジータ達が不在のアイルスター島。
マフィアに市民を人質に取られたヘルエスは、
市民の安全を条件に抵抗を止め、彼らの前に跪いた。

屈強なマフィアの男たちに引き立てられ、
広場に現れた元王女ヘルエス。
裸同然の卑猥な格好を強要され、首輪で引き回されながらも
毅然と前を向き、弾む丸出しの乳房を気にかける風も無く、
気品に満ちた足取りで歩を進める。

広場の中央に設けられた舞台に上がると、マフィア達は
集められた市民に向かって大声で宣言する。
「これより元王女ヘルエス様の交尾ショーを行う！
へへへ！みんな楽しんでいってくれよ！」

数百人が集まる広場には、パンパンと腰を打ち付ける軽やかな音だけが響き渡っていた
市民の誰もが敬愛するヘルエスが、無残にも裸に剥かれ、公衆の面前で犯されているのだ
皆奥歯を噛み締め、押し黙っていた
下劣なマフィアの男達は、ヘルエスがより恥辱を味わうよう、舞台の前に集められた
年端もゆかぬ子供達に見せ付けるような格好でヘルエスを犯した
「すみませんね…んっ…見苦しいものを見せてしまって…」
無残に純潔を散らされ、公衆の面前で犯されながらも
ヘルエスは戸惑う子供達に優しく声を掛ける
「へ、ヘルエス様…」
「ヘルエス様をいじめないで…」
プル
プルン
「おやおや初めての癖に随分濡れてるじゃねーか？
大勢に見られて燃えちまったか？ヒヒヒ」
卑猥な言葉でヘルエスを詰りながら
激しく腰を叩き付けるマフィアの男
ズプッ
「ん……くっ！……っ！」
ズプッ
「ヘルエスさま！」
「やめて！ヘルエス様が死んじゃう」
くっ
ズプッ
ズプッ
んっ
子供達の悲鳴を切っ掛けに、押し黙っていた大人達もざわめき出す
「黙っていりゃ調子に乗りやがって…」
「くそ……ヘルエス様を…よくも…」
ブルン
大人達の気勢に反応し、マフィア達が剣に手を掛ける

「手出し無用！これは私の戦いです！」

広場にヘルエスの凛とした声が響き渡った

「短気を起こしてはいけません！今は皆耐えるのです！」

ヘルエスの威厳に満ちた声は、一瞬で広場に満ちた殺気をかき消した

「へ、ヘルエスさまー！」
「が、がんばって！」
「ヘルエス様！がんばれー」

せめてもと子供達はヘルエスを声の限りに応援した

激しい抽送に身を揺らしながら、ヘルエスは体の内より全く未知の感覚が上って来るのを感じていた

愛する市民達に裸を見せつけ、無様に犯される醜悪な筈の行為なのに、何故か体中が燃えるように熱いまるで獣が発情するような何かが…

「おらっ！いくぞ！」

マフィアの男がねじ込むような激しい突きで子宮にペニスを叩き付け、精液を流し込む

『――――！』

ヘルエスは声にならない声を上げ、生まれて初めてのアクメに達した

バッ
ブルッ
ブルッ
ズリ
ズリ
ふっ
パン
パン
パン
じっ
んっ
ズッ
ズッ
じっ
んっ
ブルッ
んっ
グプ
グプ
ゾワ
ゾワ
ゾワ
!?
ブルッ
プシャアァァァ

公開交尾ショーから一週間。
広場近くの地下室。

ヘルエスへの陵辱は続いていた。

「エルーンのくせに尻尾が無いなんて可愛そうだからよぉ」

「おら、尻尾のプレゼントだ」

ヘルエスの内心は激しく揺れていた
本来であれば舌を噛み切りたくなる程の恥辱を受けたあの日…
己の内に歪んだ願望が潜んでいる事に気付いてしまった

自分を慕う大勢の市民の前で丸裸になり、交尾をする…まるで獣のように…

皆の前ではち切れんばかりに乳房を振り乱し、ペニスに腰を叩き付け…
頭を空っぽにし、アクメを決めながら天を仰いで思いっきり雄たけびを上げたら…

「はは！いい格好じゃねぇか！」

マフィアの男達による激しい陵辱を受けながら、湧き上がる変態的な妄想に思いを馳せるヘルエス

先程ヘルエスの口に射精した男が嘲笑うように言う

「エルーンの女は獣らしく素っ裸で尻振ってるのがお似合いだぜ！」

「喜べヘルエス
お前にぴったりの相手が見つかったぜ」

翌日
一週間振りに市民の前に姿を現したヘルエスだが、その様相は一変していた
裸身を晒しながらも失われていなかった高貴な眼差しはそこには無く、
顔を真っ赤に染めて俯き、口元に卑屈な笑みを浮かべ、恥ずかしそうに
辺りを伺う裸のエルーンが居るだけだった。
「へ、ヘルエス様…」

かろうじて身に着ける事を許されていたレギンスやブーツすらも
自らの意思で脱ぎ捨てヘルエスは今、露出の悦びを噛み締めていた
(ああ…私今…丸裸で引き回されている…犬の散歩をするように…)

ヘルエスの後方より現れたそれに、
ぎょっとする市民達
「イノシシ!?」
「いや…噂に聞いた事があるぞ…
確かフェアタイル島の…」
「や、山の…ヌシ…」
「何をするってんだ…?ま、まさか…」

これからするとんでもない事を思い、
ヘルエスの心臓ははち切れそうに脈打っていた
あまりの羞恥にまっすぐ前を見る事さえ出来なかった
裸のヘルエスは震える手足を懸命に動かして
山のヌシと並んで歩き、広場中央の舞台に上がった

恥ずかしい！今すぐ消えたくなるくらい恥ずかしい！
…でも…もっと燃えるような羞恥に身を焦がしたい！

誰に命令されるでもなく、ヘルエスは上体を上げて股を大きく開き、
飼い犬がするようなチンチンのポーズを取った

「み、皆さん…は、裸の淫乱エルーン…ヘルエスです…！」

遠くまで響く凛とした声は確かにヘルエス元王女のものであったが、
その変態的な姿とのギャップに市民達はショックを隠せなかった

興奮からヘルエスは犬のようにハッハッと息を荒げて体を小刻みに揺らし、
それに合わせて豊満な乳房はプルンプルンと波打ち、股間からは淫らな汁が
止め処なく流れ出ていた

「今から私は…獣になります！人としての尊厳の全てを捨て…山のヌシ様の
つがいとして…淫らな裸の獣に生まれ変わる事を…愛する祖国の名に賭けて
ここに誓いましょう…！」

「ヘルエス様！ど、どうして！？」
「畜生…あいつ達に…！」
「ヘルエス様ー！」

市民達の悲痛な叫びも、今のヘルエス
にとっては羞恥を楽しむ為のスパイス
でしか無かった

既に硬く起立している山のヌシのドリル状のペニスを
膣口にあてがい、ゆっくりと腰を下ろす
興奮した山のヌシはヘルエスに体重を掛け、
ペニスをねじ込んで来る

ガニ股の姿勢で踏ん張りながら、ヘルエスの
頭には一つの事しか浮かんでいなかった
（私は…獣になります！）

押し潰すような山のヌシのプレスを必死に耐えるヘルエス
人類のものとは明らかに異なる凶悪なドリル状ペニスが、
まだ未熟な性器をひしゃげさせながら、新しい穴を掘削
するかのように、ゆっくりヘルエスの膣を掘り進んでいった

ドリルの先端が子宮口を貫いた
山のヌシは全体重で圧し掛かってくるが、堕ちても歴戦の戦士であるヘルエスは、
渾身の力を込めて山のヌシの巨体とペニスを受け止めきった

叩き付けるような激しい抽送が始まった
ヘルエスも負けじと腰を合わせる

鈍器で殴られたような衝撃が尻から体を貫き、乳房を跳ね上げる

ぐっ
プギッ
ぶんっ
おっ
プギィ
ブルッ
ブルン

バチンバチンと鈍く激しい音が、しんと静まり返った
広場に響き渡る
市民達は呆然とヘルエスと山のヌシの凄まじい交尾を
見つめるしか無かった

ヘルエスの脳裏からは一切の思考が消え、荒々しい
獣の悦びだけがそこにあった

やがて二匹の獣は強烈な絶頂の予感に体を震わせた

おおっ
ズッ
ズッ
バチッ
バチッ
バチッ
おおおっ
おっ

子宮口を貫いたドリルの先端から大量の精液が放たれた

子宮で燃えるような精子の熱を感じたヘルエスは
喉を反らして天を仰ぎ――

ビッ
ビッ
ビッ
ビュルッ
ビュルッ
ビュルッ

おおおおおおおっ

普段の気品溢れる凛とした声とは似ても似つかぬ、野獣の様な
野太い咆哮をあげ、滝のような潮を吹きながら獣アクメを決めた

プシッ
プシャァァァァ